

曹洞宗は、お釈迦様を本尊とし、永平寺を開かれた道元禪師と、總持寺を開かれた瑩山禪師のお二人を「両祖」とし、師匠から弟子へと教えを受け継ぎ、御仏の教えを護る宗派です。

道元禪師は、建長五年（一二五三年）八月二十八日に五十四歳で、瑩山禪師は、正中二年（一三二五年）八月十五日に六十二歳でお亡くなりになりました。

旧暦ではひと月以上離れていますが、太陽暦では、いずれも九月二十九日に相当することに合わせて、この日に、曹洞宗のお寺において両祖である、道元禪師、瑩山禪師を偲び「両祖忌」という法要が営まれます。

さて、大切な方の法要を営むとき、皆さんは、どんなことを思われますか？

故人と一緒に過ごした楽しかった出来事を思い出したり、慌ただしく過ぎ去った葬儀の時のことを振り返ったり、今日のこの日を共に立ち会ってくれる仲間に感謝の気持ちを持ったりするでしょう。

人それぞれにその思いは、実にさまざまであることと思います。さまざまな気持ちを持ちながらも、私たちは、共に同じ故人を偲び、法要を営むのです。法要は、故人と私たちを繋ぎ、また、故人を通じて残された私たちと、数多くの人々を繋ぎ合わせる大切な役割があるのです。

そして、残された私たちは一人一人、故人とのそれぞれの思い出を持っています。一人一人が受け継ぐ故人の思いや教えも、異なる事もあります。

掛け替えのない故人の思いを受け継いでいくことができるのは、残された私たち一人一人に他ならないということに思いが至る時、私たちは、一人一人に掛け替えのない大切な使命があることに気がつくのです。

道元禪師、瑩山禪師を偲ぶ「両祖忌」を、報恩の法要とも呼びますが、それは、現代まで師匠から弟子へと脈々と受け継がれてゆく掛け替えのない教え、その礎を築かれた両祖様への感謝の気持ちを表すからであるともいえます。

ぜひこの日に、皆様のお家の故人への想いと共に、曹洞宗の菩提寺の教えの源である、道元禪師、瑩山禪師に想いを寄せてみてはいかがでしょうか。